リモートによる感染症医療通訳基礎トレーニングとロールプレイ演習の取り組みⅡ

「HIV 検査と医療へのアクセス向上に資する多言語対応モデルの構築に関する研究」班

研究分担者　宮首　弘子　杏林大学外国語学部教授
沢田　貴志　神奈川県勤労者医療生活協同組合港町診療所所長
研究代表者　北島　勉　　杏林大学総合政策学部教授
研究協力者　Tran Thi Hue エイズ予防財団リサーチレジデント

研究要旨

令和 2 年度に続き、新型コロナウイルスの感染拡大は依然として収まらず、新規外国人の入国は制限されたものの、在留外国人の医療へのアクセス支援は必要とされている。コロナ禍で医療通訳の稼働は対面が減る傾向にあるが、電話やタブレット、Zoom 等を利用した遠隔通訳はむしろ増えたとの声があり、遠隔通訳のスキルアップが急務となり、医療通訳者のリモート研修へのニーズは高まっている。

研究班は令和 2 年度で実施した Zoom によるリモート研修の実績を踏まえて、本年度も大阪 CHARM と多言語リソースかながわ（以下 MIC かながわ）に業務委託し、合計 7 回リモート感染症医療通訳研修を実施した。大阪 CHARM 主催の研修では、参加者は CHARM に登録済かこれから登録する予定者を対象として募集し、大阪府、京都市、兵庫県や和歌山県、奈良県、滋賀県から集まった。研修は 4 回に分けて実施し、合計で 98 名の参加を得た。MIC かながわ主催の研修では、北海道から沖縄まで 125 の国際交流団体と MIC かながわの会員・通訳スタッフに募集案内し、参加者は首都圏や東北地方を中心に、三重県、兵庫県や佐賀県から参加者が集まり、3 回合計 195 人の参加が得られた。遠距離でも簡単に参加できるというリモート研修ならではのメリットが今年度も示されたと考える。

本報告の扱う研修の主な内容は、通訳スキルアップに有効な通訳基礎トレーニング法の紹介と演習、HIV や結核の医療現場を想定したロールプレイ通訳演習である。通訳技法の紹介は、系統的に通訳訓練を受けておらず、現場経験も不十分な参加者が多いことを踏まえて、各種通訳トレーニング法を演習の形で紹介し、自宅でも簡単に自主トレーニングできることを体験してもらい、日々の自主学習につながることを目的としている。ロールプレイ通訳演習は、現場経験のある通訳者の要望に応えて、HIV 患者が医師やソーシャルワーカーとのやりとりを想定したシナリオを新規に作成した。演習は遠隔医療現場さながらの緊張感を模擬体験してもらい、一人一人の通訳パフォーマンスを具体的に評価することで、総合的に通訳力と対応力の向上を図るものである。

研修終了後に、通訳基礎トレーニング法とロールプレイ演習についてそれぞれアンケートを実施し、参加者の回答から研修の効果を確認し、今後の改善点を洗い出した。

A. 研究目的

新型コロナウイルスの影響が続いているため、日本政府観光局（JNTO）によると[1]2021 年の訪日外客数は 24 万 5,900 人で前年比 94.0%減で、統計開始以来最低水準となった。国籍別でみると[2]、中国、ベトナム、米国、韓国、インドは上位 5 か国を占める。また、法務省入国在留管理庁の統計によると[3]、令和３年６月末の在留外国人数は，２８２万３，５６５人で，前年末に比べ６万３，５５１人（２．２％）減少。中国、ベトナム（０．４％増）、韓国、フィリピン、ブラジルが上位 5 か国を占める。

コロナ禍の影響を受け、訪日外国人と在留外国人がともに減少しているとは言え、一次的な現象にすぎず、外国人観光客と外国人労働者へのニーズは依然として高いと考える。

本年度は新型コロナウイルス４波、５波と続き、病院や保健所などの医療機関はコロナ対応に追われ、外国人の医療へのアクセスがより厳しいものとなった。まして HIV 検査や治療はさらに困難な状況に陥ると危惧された。

一方では、医療現場では対面の通訳が減る時期もあるものの、MIC かながわなどから遠隔通訳への需要は高まったと聞いた。感染を防ぐために、病院に出向いて通訳するのではなく、電話やタブレットを使って、または Zoom を利用しての遠隔通訳が可能だとわかり、利用が広がった。医療通訳者はコロナウイルス感染拡大に伴い、いきなり遠隔通訳を迫られる事態となり、否応なく手探りながら、遠隔通訳を始めた。ただでさえ難しい医療通訳が、ノウハウの殆どない遠隔通訳を行うのに戸惑いの声が多く聞かれた。IT 環境の問題から、操作するノウハウの不足、対面と異なる対応の難しさなど、現場の医療通訳者にとっては、遠隔通訳のスキルをいち早く身につけるのが急務となった。

遠隔通訳のノウハウを教えてほしいという現場のニーズに対応すべく、昨年度はリモート通訳研修のひな型を作り実施し、手ごたえを感じた。本年度は昨年度の実施状況を踏まえて、遠隔の通訳演習を増やすとともに、さらにロールプレイ演習のシナリオを見直し、医師だけでなく、ソーシャルワーカーの HIV 患者対応を含んだシナリオを新たに作った。研修の実践的な内容と遠隔通訳演習を充実させることによって、参加者が現場に出る自信を生まれることを目標とした。昨年度に続き、今年度もすべてリモートで感染症通訳研修を実施し、昨年度に作り上げたリモート通訳研修のひな型の改善を図り、より有効な研修モデルの構築を目指した。

B. 研究方法

１．研修の流れ

令和３年度の通訳技術研修は、昨年度に引き続き[4]、大阪市を拠点とする NPO「大阪 CHARM」と横浜市を拠点とする NPO「MIC かながわ」に主催を依頼して、研修を行った。

通訳技術の研修は、通訳基礎トレーニング演習とロールプレイ演習の２部構成である。

実施日時は次のとおりである。

〇大阪 CHARM 主催

・１部：通訳基礎トレーニング演習
　　2021 年 10 月 2 日　13:00～17:00

・２部：ロールプレイ演習：
　　2021 年 10 月３０日　9:30～17:00

〇MIC かながわ主催

・１部：通訳基礎トレーニング演習
　　2022 年２月 5 日　13:00～16:30

・２部：ロールプレイ演習
　　2022 年２月 13 日　10:30～17:00

本年度は昨年度に続き、すべての研修を Zoom を使ったオンライン講座とした。大阪 CHARM 主催の２回は、CHARM に登録した者、もしくは登録する意欲のある方を対象とし、大阪府、兵庫県、京都市を中心に、和歌山県、奈良県、滋賀県在住の可能性もある。

一方、MIC かながわは昨年度同様、研修者の募集範囲を全国に広げて募集した。

今年度の研修で各組に共通する項目・内容と流れは、表１のとおりである。

表１．研修の流れ

	項　　目	内　　容	実施方法
1部	医療通訳の心得講義	・遠隔通訳の心得とノウハウ	・Zoomによるリモート一斉講義
	医療通訳技術の講義	・クイックレスポンスの練習法	・Zoomによるリモート一斉講義
		・シャドーイングの練習法	・Zoomによるリモート一斉講義
		・リプロダクションの練習法	・Zoomによるリモート一斉講義
		・記憶とメモテーキング法	・Zoomによるリモート一斉講義
	通訳基礎トレーニング演習	・HIV・結核専門用語のクイックレスポンス練習	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
		・HIV・結核の関連文のシャドーイング練習	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
		・HIV・結核の関連文のリプロダクション練習	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
		・メモテーキングの練習	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
	成果アンケート（1部）	・研修成果自己確認	・Google Formを通したアンケート配信と回答集計
2部	ロールプレイ演習（１回目）	・通訳心得の寸劇によるプレゼンテーション	・Zoomによるリモート一斉講義
		・各参加者ロールプレイ実演と指導１	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
		・実演の録画１	・Zoomによる録画
		・参加者相互の実演見学１	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
	ロールプレイ演習（２回目）	・ロールプレイ実演と指導２	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
		・実演の録画２	・Zoomによる録画
		・参加者相互の実演見学２	・Zoom Breakout Roomsによるリモートグループワーク
	録画フィードバック（２部）	・ロールプレイ実演の自己確認	・Zoomによる録画配信
	成果アンケート（２部）	・研修成果自己確認	・Google Formを通したアンケート配信と回答集計

2. 通訳基礎技術と遠隔通訳のノウハウに関する演習

1 部の通訳基礎トレーニング演習は、通訳に必要なスキルを如何に身につけ、なおかつ日々向上していくかの方法論を紹介して、演習を通して習得してもらうのが狙いである。

研修の内容は、

(1) 医師の視点から見る医療通訳者に必要な心得講義

(2) 医療通訳者を養成する観点から通訳スキルを向上するための方法論の講義と演習の構成である。

(1)では研究班の沢田が医師の立場から、「医療通訳のこれから　遠隔通訳の活用を考える」（CHARM 主催の回のみ）と題して、コロナ禍において医療通訳に求めるスキルとは何かを教えるものである。医療現場での遠隔通訳への需要の高まり、遠隔通訳の種類、遠隔通訳の長所と短所、遠隔通訳ならではの注意点について、沢田医師本人および現場の医療通訳者の生の体験を踏まえて紹介しつつ、ケーススタディの形で遠隔通訳の難しさと工夫すべきところ（ノウハウ）を理解してもらった。

(2)では、宮首が通訳者養成の観点から各種通訳基礎トレーニング法の講義と演習である。ボランティア通訳者の多くが通訳訓練を十分に受けていないことを踏まえて、基礎となるシャドーイング、リプロダクション、クイックレスポンス、ノートテーキングなどのトレーニング方法が如何に日頃自宅で取り込むかを、HIV や結核の専門用語やフレーズの音声ファイルを用いて練習し、訓練法を体得してもらう。さらに、Zoom のブレークアウトルーム機能を使って、通訳言語別にグループ学習を行った。これらの練習を通して、自宅でも、一人でも手軽に練習して、通訳のスキルアップができることを体感してもらった。

3. ロールプレイ通訳演習

2 部のロールプレイ演習は、現場経験のないもしくは不十分な参加者に現場を模擬体験することによって、自身の通訳能力や現場対応力の確認と向上を目的としている。

今年度は遠隔通訳現場の再現を意識して、医療者役と患者役は研修主催側が用意した会議室で

対面によるロールプレイを行い、研修参加者は医療通訳者として、Zoom を通して遠隔通訳を行う形でロールプレイ通訳演習を進めた。

ロールプレイシナリオは、昨年度までは HIV 感染告知や患者に治療法を説明する場面、結核の初回面接や退院して DOTS への 4 つのシナリオを用いて研修を行ってきた。本年度は、これまでの研修の蓄積を踏まえて、現場でのニーズの高い HIV 医療費に関するシナリオを大阪 CHARM の協力を得て、研究班沢田医師の監修の元新たに作成した。結核のシナリオは現場ニーズのもっとも多い「外来から退院して DOTS へ」を継続使用した。

◎シナリオ①結核と HIV 医療費：

・場面設定：A 国で政治的な迫害を受けて日本にやってきた B さん。首にしこりができて病院に受診したところ、リンパ節結核になっていることがわかり外来治療をすることになった。診察中、実は HIV に感染し、5 年前から薬を飲んでいることを B さんから打ち明けられた医師は、医療費についてソーシャルワーカーに相談するよう勧め、B さんがソーシャルワーカーと面談することになった。

・場面①：リンパ節生検後の診察。医師と患者のやりとり。

・場面②：2 週間後患者とソーシャルワーカーとの面談

◎シナリオ②結核患者が外来から退院して DOTS へ：

・場面設定：患者は排菌をして入院治療をしていたが、2 ヶ月の入院治療の結果排菌がなくなり退院できることになった。今後確実に薬を飲める環境にあるか、どんな支援が必要か評価するために保健師が訪問をすることになった。

研修参加者には事前情報として、上記のロールプレイ演習の場面設定および関連する専門用語を 1 週間前に知らせて、専門知識の事前調べや用語のクイックレスポンスなどの自主学習をして、事前準備をしてもらった。

医療者役と患者役は「MIC かながわ」や「大阪 CHARM」のベテラン医療通訳者に依頼し、現場の雰囲気を醸成した。

実施に当たっては、少人数の相互学習効果を勘案し、言語別少人数での実施とした。実施言語は現場のニーズに応じるものとした。大阪 CHARM は現場需要の多い中国語、英語、ベトナム語の 3 言語を選び実施し、22 名が参加した。MIC かながわは中国語、ベトナム語、ポルトガル語の 3 言語を実施し、全体で 29 名が参加した。言語別ロールプレイ通訳演習は、1 グループは 5 名を上限とし、参加者全員が 2 回ずつ通訳するチャンスが与えられるよう人数制限（見学を認める）を行った。

実施の流れとしては、シナリオを参加者の人数分に均等に分けて、参加者 1 人に 2 ページ程度のシナリオを通訳する形をとって進めた。各参加者は同じシナリオを二回通訳するように設定し、1 回目よりも 2 回目が改善できたかを実感してもらうねらいである。

Zoom には録画機能が備えているため、参加者に事前に意思確認をし、同意を得たうえでロールプレイ通訳演習を録画した。研修終了後に録画の URL を該当参加者のみに提供し、各自の振り返り勉強に使ってもらうように設定した。

４．評価方法

研修成果の確認のため、研修参加者に対し、研修に関するアンケート調査（別紙１、２）を実施した。アンケートは半構造的質問形式で、有効性の程度の評価と自由所感を収集した。本年度は Forms を利用したオンラインによるアンケート配信と集計を行った。研修当日ではなく、後日のアンケート集計となったため、参加者の全数の集計とはならなかった。

ロールプレイ演習では、通訳に求められる基本的能力を正確性と迅速性の両軸から捉える評価法を採用している。リモートでの実施を考慮に入れ、昨年度見出した簡略な評価方法を今年度も用いた。

具体的言うと、通訳の正確性を測るためには、

評価ポイントを数値化し、できなかったところを減点する、という簡便な減点方式を採用した。各言語、各グループの指導スタッフはこの統一した評価シートを用いて、参加者の通訳パフォーマンスを採点しながら、具体的に問題点を指摘し、改善の方法をアドバイスする。

通訳の迅速性を測るためには、タイムキーパーを設けて、1 回目と 2 回目それぞれ通訳の所要時間を測り、1 回目と 2 回目どれほど時間が短縮できたかをその場で本人にフィードバックし、参加者に研修成果を実感してもらうのが狙いである。

（倫理面への配慮）

すべてのアンケート調査は、当研究班代表者が所属する杏林大学大学院国際協力研究科の研究倫理委員会から承認を得ている。また、ロールプレイの録画への参加は任意であることを事前に説明し、調査参加の同意を得て実施した。

C. 研究成果

1. 研修参加者の属性

研修者数は MIC かながわが 1 部・通訳基礎演習 65 人、2 部ロールプレイ演習 24 人、大阪 CHARM は 1 部・通訳基礎演習 28 人（複数言語の登録あり）、2 部・ロールプレイ演習 20 人から回答を得た。（表 2）。

表 2．研修参加者のプロファイル

		MICかながわ		大阪CHARM		合計	割合
		1部 通訳 基礎	2部 ロール プレイ	1部 通訳 基礎	2部 ロール プレイ	（人）	(%)
		65	24	28	20	137	100.0
性別	女	57	22	28	19	126	92.0
	男	8	2	0	1	11	8.0
母語	**日本語**	36	11	18	14	79	57.7
	英語	0	0	0	1	1	0.7
	中国語	7	4	7	4	22	16.1
	韓国語	1	0	0	0	1	0.7
	ベトナム語	15	6	0	0	21	15.3
	タイ語	2	0	1	0	3	2.2
	フィリピン語	0	0	1	0	1	0.7
	スペイン語	1	0	1	1	3	2.2
	ポルトガル語	3	3	0	0	6	4.4
年齢	20-29	7	2	2	2	13	9.5
	30-39	9	3	4	2	18	13.1
	40-49	18	11	5	5	39	28.5
	50-59	13	5	8	7	33	24.1
	60-	18	3	9	4	34	24.8
学歴	高等学校卒	7	3	1	2	13	9.5
	大学卒	44	17	17	11	89	65.0
	大学院卒	9	2	8	6	25	18.2
	短期大学卒	3	0	1	1	5	3.6
	専門学校卒	2	2	1	0	5	3.6
日本在住年数	日本で育った	35	9	15	12	71	51.8
	1年未満	0	0	0	0	0	0.0
	1～5年	5	1	1	1	8	5.8
	6～10年	7	4	1	1	13	9.5
	11年以上	18	10	11	6	45	32.8
医療通訳経験	ない	21	8	7	7	43	31.4
	10件以下	17	6	5	2	30	21.9
	11～50件	16	5	9	5	35	25.5
	50～100件	7	2	1	2	12	8.8
	101件以上	4	3	6	4	17	12.4
遠隔通訳経験	ない	43	15	16	12	86	62.8
	ある	22	9	12	8	51	37.2
所属	NPO団体	12	4	12	8	36	26.3
	国際交流協会	18	4	1	2	25	18.2
	病院	8	3	4	2	17	12.4
	民間企業	6	4	1	2	13	9.5
	フリーランス	21	9	10	6	46	33.6

母語別では、日本語母語者が約 60%、中国語とベトナム語がそれぞれ約 15%、その他が約 10%

であった。日本在住は日本語ネイティブ以外では10年超が多く、合わせて8割超であった。

研修参加者の所属は、国際交流協会やNPOなどに所属する現役の医療通訳者が多く、フリーランスの医療通訳希望者の参加も高い割合で見られた。

医療通訳経験では参加者の約半数が経験10件以下であった。またリモート通訳経験は約60%が未経験であった。

参加者の通訳言語は、MICかながわの研修では、英語、ポルトガル語、スペイン語、フランス語の他、中国語、ベトナム語、韓国語、タイ語、ネパール語、インドネシア語のアジア言語の計10言語であった。大阪CHARMの研修では、英語、スペイン語、フランス語の他、中国語、ベトナム語、韓国語、ネパール語、タイ語、フィリピン語のアジア言語、計9言語であった（表３）

表３．言語別研修参加者

	MICかながわ		大阪CHARM		合計	**割合**
	１部 通訳 基礎	２部 ロール プレイ	１部 通訳 基礎	２部 ロール プレイ	（人）	(%)
参加言語	65	24	28	20	137	100.0
英語	17	0	11	6	34	24.8
中国語	14	11	9	7	41	29.9
韓国語	3	0	1	1	5	3.6
ベトナム語	16	7	2	2	27	19.7
ネパール語	1	0	1	0	2	1.5
タイ語	3	0	1	0	4	2.9
フィリピン語	0	0	1	1	2	1.5
インドネシア語	1	0	0	0	1	0.7
フランス語	4	0	1	0	5	3.6
スペイン語	5	0	3	3	11	8.0
ポルトガル語	7	6	0	0	13	9.5

2. 通訳基礎トレーニング演習の成果

(1) 通訳技法に対する認識と有効性

研修後のアンケートを通して、通訳基礎トレーニングにおける通訳技法の講義と演習によって研修参加者の通訳技法の認識が前進したかどうかを確認した（表４）。

「各種通訳技法を知っていたか」は、参加者の約30～50%が「知らない」「聞いたことがある」であり、「多少練習したことがある」が約４割の回答であった。

「シャドーイング」等の各通訳技法の有効性については、両研修ともに「強くそう思う」「そう思う」が 80%超であり、研修効果が認められる。

表４．通訳基礎演習の有効性

		MICかながわ	大阪CHARM	参加者合計	
属性	分類	65	28	93	割合%
シャドーイングを知っていたか	a.知らない	4	5	9	9.7
	b.聞いたことがある	10	6	16	17.2
	c.多少練習したことある	43	9	52	55.9
	d.よく練習している	8	8	16	17.2
シャドーイングの有効性	a.強くそう思う	27	13	40	43.0
	b.そう思う	30	13	43	46.2
	c.どちらかといえばそう思う	7	2	9	9.7
	d.どちらかといえばそう思わない	1	0	1	1.1
	e.まったく思わない	0	0	0	0.0
クイックレスポンスを知っていたか	a.知らない	12	10	22	23.7
	b.聞いたことがある	19	5	24	25.8
	c.多少練習したことある	27	5	32	34.4
	d.よく練習している	7	8	15	16.1
クイックレスポンスの有効性	a.強くそう思う	30	14	44	47.3
	b.そう思う	26	12	38	40.9
	c.どちらかといえばそう思う	8	2	10	10.8
	d.どちらかといえばそう思わない	1	0	1	1.1
	e.まったく思わない	0	0	0	0.0
リプロダクションを知っていたか	a.知らない	12	9	21	22.6
	b.聞いたことがある	24	5	29	31.2
	c.多少練習したことある	26	9	35	37.6
	d.よく練習している	3	5	8	8.6
リプロダクションの有効性	a.強くそう思う	28	14	42	45.2
	b.そう思う	28	12	40	43.0
	c.どちらかといえばそう思う	7	2	9	9.7
	d.どちらかといえばそう思わない	1	0	1	1.1
	e.まったく思わない	1	0	1	1.1
ノートテーキングを知っていたか	a.知らない	2	2	4	4.3
	b.聞いたことがある	19	6	25	26.9
	c.多少練習したことある	34	9	43	46.2
	d.よく練習している	10	11	21	22.6
ノートテーキングの有効性	a.強くそう思う	40	14	54	58.1
	b.そう思う	20	14	34	36.6
	c.どちらかといえばそう思う	4	0	4	4.3
	d.どちらかといえばそう思わない	1	0	1	1.1
	e.まったく思わない	0	0	0	0.0

(2) リモートによる演習の効果

参加者が本年度二年目の試みであるリモートによる演習について対面による演習と比較した有効性とメリット・デメリットをどのように評価したかを研修後のアンケートで確認した（表５）。

対面による演習と比較した有効性については、両研修ともに参加者からは、「とても効果的」「効果的」とする評価を50～70%超で得られ、「変わらない」を加えると、80%超がポジティブな評価となった。しかし、「困難」「とても困難」との回答もあり、工夫する余地があることもわかった。

具体的なリモートによる研修のメリットとし

て、約 80%の参加者が「移動等時間ロス不要」「遠隔地でも参加可能」「感染リスクがない」を挙げた。また少数意見ながら「リラックスして集中しやすい」「グループ分けが容易」「チャット機能は便利」などリモートの機能面での肯定的意見もあった。

デメリットとしては、「参加者間の交流困難」を 50%超の参加者が指摘し、その他「意見交換困難」「集中力持続困難」などである。また、リモートの機能面で約 20%の参加者が「通信環境不安定」「通信機器使い慣れない」を指摘した。改善すべき点として「質問困難」が挙げられる。

全体として、リモートによる研修には、まだ改善の余地がある。

表５．リモート実施の有効性とメリット・デメリット

属性	分類	MICかながわ	大阪CHARM	参加者合計	割合%
		65	28	93	
リモート研修の効果（対面研修に対して）	a.とても効果的	16	10	26	28.0
	b.効果的	21	11	32	34.4
	c.変わらない	18	6	24	25.8
	d.困難	9	0	9	9.7
	e.とても困難	1	1	2	2.2
リモート研修のメリット（複数回答可）	移動等時間ロスがない	53	26	79	84.9
	リラックスして集中しやすい	21	15	36	38.7
	遠隔でも参加可能	48	24	72	77.4
	感染リスクない	52	20	72	77.4
	グループ分けが容易	13	11	24	25.8
	チャット機能は便利	16	15	31	33.3
リモート研修のデメリット（複数回答可）	通信環境不安定	16	8	24	25.8
	通信機器使い慣れない	10	7	17	18.3
	意見交換困難	21	5	26	28.0
	参加者間の交流困難	37	13	50	53.8
	集中力持続困難	15	8	23	24.7
	質問困難	3	5	8	8.6

3. ロールプレイ演習の成果

(1) ロールプレイの改善効果

ロールプレイ演習では、各参加者が 2 回実演し指導を受けて改善してゆくように設計している。研修後のアンケートを通して、ロールプレイの改善効果を研修参加者がどのように評価したかを確認した（表６）。

「研修の流れ」は、両研修の参加者から 90%超の「とてもよい」「良い」評価を受けた。「他参加者の実演を参考」も 90%超の「とても参考になる」「参考になる」評価を受けた。

「専門用語の理解」「医療者対応能力」「患者対応能力」については、「改善した」以上が 80%超の高い評価を得た。

「メモ取り要領の向上」については、「改善した」以上の評価が 40～50%程度であり、評価が分散した。リモートではメモ取り要領の画面が十分に確認できなかったことが考えられる。

「医療者と患者対応の困難度」については、「医療者対応が難しい」が 50%超で、「患者対応が難しい」が 15%の 3 倍以上であった。

表６．ロールプレイ演習の改善効果

属性	分類	MICかながわ	大阪CHARM	参加者合計	割合%
		24	20	44	
研修の流れ	a.とても良い	20	12	32	72.7
	b.良い	4	7	11	25.0
	c.普通	0	1	1	2.3
	d.悪い	0	0	0	0.0
	e.とても悪い	0	0	0	0.0
専門用語の理解の深まり（1回目に対する2回目）	a.強くそう思う	10	7	17	38.6
	b.そう思う	12	11	23	52.3
	c.どちらかといえばそう思う	2	2	4	9.1
	d.どちらかといえばそう思わない	0	0	0	0.0
	e.まったく思わない	0	0	0	0.0
患者対応能力の向上（1回目に対する2回目）	a.強くそう思う	4	3	7	15.9
	b.そう思う	15	14	29	65.9
	c.どちらかといえばそう思う	5	2	7	15.9
	d.どちらかといえばそう思わない	0	1	1	2.3
	e.まったく思わない	0	0	0	0.0
医療者対応能力の向上（1回目に対する2回目）	a.強くそう思う	4	3	7	15.9
	b.そう思う	16	13	29	65.9
	c.どちらかといえばそう思う	4	3	7	15.9
	d.どちらかといえばそう思わない	0	1	1	2.3
	e.まったく思わない	0	0	0	0.0
メモ取り要領の向上（1回目に対する2回目）	a.強くそう思う	5	2	7	15.9
	b.そう思う	11	10	21	47.7
	c.どちらかといえばそう思う	8	7	15	34.1
	d.どちらかといえばそう思わない	0	1	1	2.3
	e.まったく思わない	0	0	0	0.0
他参加者の実演を参考	a.強くそう思う	14	8	22	50.0
	b.そう思う	10	10	20	45.5
	c.どちらかといえばそう思う	0	2	2	4.5
	d.どちらかといえばそう思わない	0	0	0	0.0
	e.まったく思わない	0	0	0	0.0
医療者と患者対応の困難度	a.医療者の方がずっと難しい	6	4	10	22.7
	b.どちらかといえば医療者の方が難しい	6	8	14	31.8
	c.どちらも同じ程度に難しい	9	4	13	29.5
	d.どちらかといえば患者の方が難しい	3	4	7	15.9
	e.患者の方がずっと難しい	0	0	0	0.0

(2) リモートによる演習の効果

本年度で二年目の試みであるリモートによるロールプレイ演習の有効性を、研修参加者への研修後アンケートで確認した（表７）。

研修参加者からは、両研修とも「とても効果的」「効果的」とする評価は 40%超で、「変わらない」を含めると 80%超がポジティブな評価をした。一方では、「困難」との回答が約 20%あり、改善の

余地があることが認められる。

具体的なメリットとして「遠隔地でも参加可能」「移動等時間ロス不要」「感染リスクがない」などが 70%～90%で指摘されている。これは１部の通訳基礎演習に共通する意見である。また「リラックス・集中できる」「録画機能は有効」などリモートの機能面での肯定的意見もあった。

デメリットとしては、「通訳の区切りのタイミング困難」が約 50%で指摘されている。同様に、改善すべき点として「表情等の情報入手困難」「臨場感・緊張感低い」「ニュアンス伝達困難」等が挙げられる。リモートの機能面で「通信環境不安定」が 40%超で指摘された。

全体として、リモートによるロールプレイ演習については、依然として改善の余地が多いことが判明した。

表７．ロールプレイ演習のリモート実施の有効性とメリット・デメリット

		MICかながわ	大阪CHARM	参加者合計	
属性	分類	24	20	44	割合%
リモート通訳のロールプレイ（対面通訳に比して）	a.とても効果的	2	3	5	11.4
	b.効果的	8	9	17	38.6
	c.変わらない	9	5	14	31.8
	d.困難	5	3	8	18.2
	e.とても困難	0	0	0	0.0
リモート研修のメリット（複数回答可）	移動等時間ロスがない	20	17	37	84.1
	リラックスして集中しやすい	5	8	13	29.5
	遠隔でも参加可能	22	18	40	90.9
	感染リスクない	20	13	33	75.0
	音声聞き取り容易	8	5	13	29.5
	録画機能有効	11	6	17	38.6
リモート研修のデメリット（複数回答可）	通信環境不安定	12	7	19	43.2
	通信機器使い慣れない	2	4	6	13.6
	表情等の情報入手困難	6	7	13	29.5
	区切りのタイミング困難	14	9	23	52.3
	臨場感・緊張感低い	5	3	8	18.2
	ニュアンス伝達困難	1	3	4	9.1

D．考察

1. リモートによる通訳技法習得の模索

令和２年度の研修からは、コロナ下での実施のため、これまでの対面から Zoom によるリモート実施を余儀なくされた。リモートによる実施に切り替えたことで、これまで 2 日間の対面研修を 4 回に分けて実施することが可能となり、より充実した研修が可能となった面もある。

令和３年度の研修については、前年度の成果を踏まえて、リモートによる研修の充実を図った。通訳技法の習得については、参加者個人が自宅で取り組める訓練法の習得を目的としているので、説明は簡単に止めて、演習を通して、やり方を覚えてもらうことにポイントを置いた。

前年度同様に、参加者全員に実際練習する機会を持ってもらうために、Zoom のブレークアウトルームの機能を使ってグループ学習を行った。主催団体のスタッフにグループ学習のリーダーになってもらい、各種通訳トレーニング法を実例を通して、全員参加の形で練習してもらい、訓練法への理解を深めた。この方式はリモートならではの迅速かつ効果的な方策であり、参加者の満足度も高かった。

一方では、昨年度同様、リモートに慣れていない参加者がブレークアウトルームへの参加や質問に戸惑いを感じるケースが見られた。

今後の問題点として、多人数多言語の参加者を適切に複数のグループに振り分けるのは現実的には限界がある。また、参加者の満足度を上げるのに、引き続き工夫する必要があると考える。

2. リモートによるロールプレイ通訳演習の模索

本演習の目的はこれまでは、HIV や結核という感染症の医療現場を疑似体験することによって、未経験からくる心理的ストレスを軽減し、医療従事者や患者への対応の要領を体感して修得して

もらうものである。ロールプレイ演習の項目・内容と流れは、これまでの5年間の実績を踏まえたロールプレイ研修モデルに基づいて設計している。昨年度からはZoomによる遠隔通訳の形での実施となり、遠隔通訳の現場も体験してもらい、遠隔通訳ならではの難しさを理解しその対応能力の修得という目的を付け加えた。

Zoomによるロールプレイ通訳演習の難しい点は、言語別を同時に進行するためには、対面で行う医療者役と患者役ための複数の部屋の用意と、通訳を務める参加者をZoomのブレークアウトルームに振り分けして同時進行させることである。今年度は昨年度の経験を活かし、スムーズに実施できた。

また、リモートによるロールプレイ通訳演習は、Zoom機能を駆使することによって、対面実施に劣らない効果が得られることがわかった。とりわけZoomの自動録画が、参加者の事後の振り返りに効果的だと評価された。回線トラブルの心配、通訳時のメモや表情が確認しづらいなどデメリットがあるものの、遠隔通訳の体験やノウハウの習得に役立つ、録画による内省がしやすいなどメリットもあり、リモートによるロールプレイ通訳演習のひな型として概成したものと考える。

3. リモート研修の長所と短所

リモートによる演習参加のメリットは何よりも移動する必要がなく、自宅からでも参加できること、地域を跨いで遠く離れた他県の通訳者との交流ができて、新鮮な刺激を受けられることである。

昨年度は新型コロナ禍の初年度ながら「感染リスクがない」ことはあまり高い評価ではなかったが、今年度の研修では逆に評価が高まった。この点は実施時期と新型コロナ流行のピークに連関すると思われるが、2年度目で感染対策の意義が定着したとも考えられる。

デメリットは、ネット環境に問題が起きる場合があることである。また、文字で書いて欲しいという参加者の要望には、スタッフとして対応に手間がかかる。さらに、医療者、患者とのアイコンタクトつまりお互いに表情の確認しづらい点、通訳者のメモの良し悪しを指導者が確認できない点も挙げられる。この点の対策は通信ソフトの改善に依存せざるを得ないと考える。

上記のことを総じて考えると、リモートによる通訳研修は遠隔通訳の実践の場でもあり、地域や形態の制限を超えて、研修の可能性を広げたと言える。一方では、通信不安定や混乱時の対応要領などハード面とソフト面における対策が必要と考える。

E．結論

今年度の研修は昨年度模索したリモート通訳研修のひな型をベースに、さらに研修内容の充実、研修方法の円滑化、参加地域の多様化を図ったものとなった。昨年度大阪CHARMとMICかながわともにリモート開催未経験で、Zoom使用法の研修から始まったが、今年度は去年の経験を活かし、研修内容の充実や実施の円滑性、参加者の多様性共に向上したと言える。

研修内容の充実については、医療通訳者にとって理解しておくべきHIV医療費、身体障碍者手帳、在留ビザなどに関する知識を新たに盛り込んだ。ロールプレイ演習のシナリオは医師、保健師とのやり取りの他、さらにソーシャルワーカーとの面談を取り入れた。通訳技法の講義はそれらの関連知識をテーマに、繰り返し演習を行い、トレーニング方法の習得と同時に専門知識の通訳スキルアップも図った。

研修方法については、主催者は昨年度初めてZoomによるリモート研修からかなり経験を積み重ねたため、企画から実施に至りスムーズであった。ロールプレイ演習は多言語、複数のグループでも同時進行が滞りなく進み、大人数のグループ学習のブレークアウトルーム利用も迅速にできるようになり、研修の幅が広がった。一方、参加者側はZoomへの参加は抵抗感がなくなり、各種の機能の利用は昨年度よりうまくなったと見えた。主催者側と参加者側ともにリモート利用に慣

れてきて、メリットをより活かせるようになったと言える。

参加者の多様性については、通訳技法は言語の指定がなく、少数言語を含め多言語の参加が得られている。参加地域は大阪 CHARM は大阪、兵庫県、京都を中心に奈良県や滋賀県、和歌山県からの参加も可能とした。一方では、MIC かながわはリモートのメリットを活かして全国で募集した。その結果、自前で通訳研修がなかなかできない地方の国際交流協会から感謝のメッセージをもらい、地方の医療通訳研修に寄与したことがわかった。

最後に特筆したい点は、研究班が業務委託したこの研修は医療通訳者の養成のみならず、地域の医療通訳派遣業務を担う大阪 CHARM と MIC かながわのスタッフのスキルアップにもつながったと考える。

参考文献

1) 日本政府観光局(JNTO) 「報道発表資料」20220119_monthly.pdf (jnto.go.jp)
2) 「2021 年の訪日外国人は 24 万人、統計開始以来最低水準に 12 月の訪日外客数もオミクロン株の影響で減少」訪日ラボ (honichi.com)
3) 法務省出入国在留管理庁「令和３年６月末現在における在留外国人数について」出入国在留管理庁 (moj.go.jp)
4) 北島勉、他(2021) 『外国人に対する HIV 検査と医療サービスへのアクセス向上に関する研究』令和 2 年度総括・分担研究報告書 (厚生労働省・科学研究費補助金エイズ対策研究事業)

Ｆ．健康危険情報

なし

Ｇ．研究発表

なし

Ｈ．知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
   なし
2. 実用新案登録
   なし
3. その他
   なし